未来への架け橋　2000

－グローバル・パートナーシップ・スクール－

米日財団奨学寄附金プロジェクト

ディレクター：米川英樹（大阪教育大）

日本側コーディネータ

大阪教育大学　森　田　英　嗣
広島大学教育学部　神　山　貴　弥
鳴門教育大学　小　野　由美子

アメリカ側コーディネータ

イーストカロライナ大学　Don Space
ノースカロライナ大学ウィルミントン校　Brad Walker
ウェスタンカロライナ大学　Lois Petrovich - Mwaniki

は　じ　め　に

1　プロジェクト前夜

米日財団の詫摩武雄氏が最初に大阪教育大学に来られたのは、1998年の４月のことであったと記憶している。その折、木下学長が私を呼び、プロジェクトを立ち上げることを強く勧めた。私は前年にアメリカのノースカロライナ州のECU（イーストカロライナ大学）に１年間、在外研究で滞在していたこともあり、そのつてを辿ってプロジェクトを持ってもよいと返事をした。詫摩さんとしては、その年の９月か10月からのプロジェクト立ち上げを期待していたようであるが、忙しさに紛れて延び延びになっていた。その年の秋になってからだったと思うが、１年間世話になったECUのスペンス先生と電話でやりとりする中で、日本側でプロジェクトを立ち上げる計画を持っていると言ったところ、驚いたことに彼自身が同じプロジェクトを始めたいと考えていることがわかった。20年来の知り合いであるスペンス先生とはすぐに合意ができて、２つのプロジェクトを別々のものではなく、一対のミラープロジェクトとして計画することになった。彼はすでに日米の参加大学の案を持っており、私も即座に賛同した。スペンス氏と私と米日財団の間で何度かのプロジェクトの案のやりとりがあった後、翌年になって東京の事務所に２人で詫摩氏を訪ね、プロジェクトの提案書に何を盛り込むべきか等について、具体的な教示をいただいた。当初は、日米でほとんど同じ内容であったのであるが、途中からは、少しずつ異なった内容になっていった。

私とスペンス先生の合意の最大のものは、21世紀を迎えるにあたって、日本人もアメリカ人も自分の文化圏だけの住人でいることは不可能であり、国際人（グローバル・シチズン）としての教育が必要であるということであった。1996年から1997年にかけて家族とともに１年間、ノースカロライナ州のグリーンビルに住んだ経験の中で、とくに３人の子どもたちが現地の学校に通って多くのことを経験するさまを目の当たりにして、私は草の根的な交流の大切さと多文化を学ぶ重要性を痛感するようになった。そしてそのために何かできることをしたいと強く願っていた。その意味で、このプロジェクトは私の心情にうってつけであった。そして、この教員の交流プロジェクトを通じて、21世紀を担う子どもたちの教育に少しでも貢献したいと強く願うようになったのである。

2　プロジェクトの内容と特徴

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトは、1999年４月に米日財団の理事会で承認され５月からスタートした。大阪教育大学、広島大学、鳴門教育大学の国内３大学とノースカロライナ州のイーストカロライナ大学、ノースカロライナ大学ウィルミントン校、ウェスタンカロライナ大学のアメリカ側３大学が中心となって、それぞれの大学の地域関連校の教員の相互交流によって、相手国の文化と教育事情をより深く理解し、それを学校の教育実践に役立てようとする企図のもとに始められたものである。期間は３ヶ年である。

日本からは、アメリカに学校教員を21名、相手国の各地域で指導的な役割を担う大学教官３名、それに全体を統括するディレクターの計25名が約２週間アメリカのノースカロライナ州の上記３大学の地元地区に滞在する。その間、学校現場に少なくとも１週間、継続的に滞在し、学校の授業の様子を観察し、

授業に参加し、教員や生徒と親しく交わることによって、アメリカの学校、授業内容、生徒や教員の文化、教育制度、教育問題、また、それらの土台となるアメリカ文化を深く理解することに努めることになっている。最後にサマリーミーティングを開いて、日米の教員が一同に会し、日本の教師が1週間の観察期間を通じて発見したことがらを発表し、考察した問題を提起することによって、日米の教員が同じテーマで討議する。そして、帰国後、何らかの形で日本の生徒への教育や学校づくりに役立てようとするものである。

アメリカ側も、日本と全く同様なプロジェクトを立ち上げている。参加者の規模や予算規模もほぼ同じである。彼らは来日後、大阪、広島、鳴門と分散し、1週間の学校観察の後にサマリーミーティングを開き、共通の問題について、日米の教員が考え、議論する。

このように、これら2つのプロジェクトは完全な双子のプロジェクトであり、全体の運営についても、日米のディレクターとコーディネータが協議して決定することになっている。このような形態のプロジェクトは、おそらくとても珍しいものであろうし、それがプロジェクト全体の大きな特徴でもある。これらの組織の概略については、組織図に示すとおりである。

ただし、2つのプロジェクトの間には若干の相違もある。その最大のものは、派遣教員の人選の際の教育委員会の関わりであろう。日本側は、どの地区でも、大学のイニシアティブのもとに、教育委員会を通じて募集を行っている。これに対して、アメリカ側では、募集に際して、教育委員会の役割はそれほど大きくはない。これは、1つには、アメリカの教員は6月末から7月にかけて来日するのであるが、この間はノースカロライナ州では夏休みで雇用期間からはずれるため、教育委員会のイニシアティブではなく、教員各自の判断で来ることができる。これに対して、日本では春休み中の渡米とはいえ、雇用期間中であるため、教育委員会の何らかの許可が必要になる。このため、募集についても教育委員会の役割が大きくなる。ただ、それ以外にも、日本の教員は組織人としての意識がアメリカの教員よりも強いようであり、教員は学校長の、学校長は教育委員会に必ず諮ってから事を進めるという面が見受けられる。

3　アメリカ教員の受け入れ

1999年度については、5月の段階でプロジェクトが米日財団によって正式にスタートしたのであるが、アメリカ側では6月15日から6月29日の滞在日程を立てていた。そのため、日本側の受け入れ校の準備などの態勢整備に追われることになった。それぞれの地域のコーディネーターは、このため、大学の附属校や地域の学校および教育委員会との折衝に多大なエネルギーと時間を費やした。すべてが未定のままであり、名簿もなく、肝心のアメリカ側のディレクターのスペンス先生が日本に4月から7月まで日本に滞在中で、ディレクター本人も細かい部分がわからないという状態が続いたが、多くの関係者の努力によって日本側の準備態勢は、ぎりぎりの段階になってようやく形を整えるに至った。6月15日から20日まで、アメリカの教員の一行は、京都、奈良、大阪、広島の史跡などの視察を行った後、6月21日から26日までの1週間、各大学サイトに分かれて学校観察を行った。地域によってスケジュールや方針がやや異なっていたが、これらの学校訪問を通じて、アメリカの教員たちは多くのことを学んだようである。6月27日のサマリー会議での熱気ある討論は、彼らの真摯な態度をよくあらわしていた。

アメリカ教員の日本での研修の全日程

6月14日（月）　アメリカを出発
6月15日（火）　成田経由で伊丹空港に到着
　　ホテル・グリーンプラザ大阪に滞在
6月16日（水）　大阪教育大学にてオリエンテーション
6月17日（木）　京都観光
6月18日（金）　奈良観光
6月19日（土）　早朝広島へ移動。宮島観光
6月20日（日）　平和公園。午後、各大学へ分散移動。
6月21日（月）～25日（金）　学校訪問
6月26日（土）　ホームステイ（大阪、鳴門地区）
6月27日（日）　全員広島へ移動。午後、サマリー会議
6月28日（月）　大阪へ移動。
6月29日（火）　帰国

4　日本教員のアメリカへの派遣

日本側がイニシアティブをとるのはアメリカへの派遣である。初年度は、2000年3月24日に直前研修を終え、翌25日に渡米した。詳しい報告は、各人の報告に譲るが、全体の日程は表に示す通りである。当初はできるだけ日本側の派遣教員の間でも、地域を超えてお互いに学びあうことを企図して、大阪、広島、鳴門の3つの地域からECU、WCU、UNCWの3つのどの大学地区にも少なくとも1人は配置しようと考えたのであるが、実際にはそれぞれの地区の事前研修に個性差があり、それぞれの地域の連帯感も強いこともあり、実現は困難であった。翌2001年度からの派遣からは、より地域間交流を意識したものに変化していった。したがって、たとえば鳴門地区からはWCUへ、大阪地区からはUNCWへ、広島地区からはECUへ行く傾向が強くなっていった。これはこれでまた、地域と地域のつながりという面ではメリットがあると思っている。

日本側の派遣は、アメリカ側とは違って、ほとんど観光旅行の部分はない。そのチャンスは、ホームステイの期間での小旅行と日程の最後の段階のローリーでの文化施設の見学のみである。日米のスケジュールのこの部分の違いはある意味で考え方の相違である。日本人にとってアメリカの社会や文化は、アメリカ人にとっての日本社会や文化よりも馴染みが深く、旅行経験者も多いことから、史跡や文化施設に多く触れるよりも、できるだけ学校に焦点化して研修を行うという考えからである。また、春休みを利用する関係から、日程的にも日本側の方が窮屈であり、観光日程はとることができない。ただし、日本からの参加教員は、行ってすぐに学校に入るため、肉体的にも心理的にも適応が大変である。しかし、日程を重ねるにしたがって、リラックスするようになり、楽しみも増えるようである。最後のサマリーカンファレンスは、研修のハイライトであり、その準備にかなり多くの時間を割く。中にはほとん

ど徹夜の方も何人かいたようである。しかし、馴れない英語を使いながら、現地の教員と交流する貴重な体験は、教員一人一人にインパクトを与え、大きな自信につながっている。その意味では、日本側の参加者が得るものはとても大きいと考えている。

日本教員のアメリカでの研修の全日程

3月24日（金）　直前研修（全体）
3月25日（土）　関空出発。デトロイトまでは全員行動。
　　デトロイト以降はグループ別行動
3月25日（土）　ECUとUNCWグループはローリー着。
　　WCUグループはアッシュビル着。
3月27日（月）～31日（金）　学校訪問
4月1日（土）　ホームステイ
4月2日（日）　全員ローリーへ移動。
4月3日（月）　Exploris Middle School とノースカロライナ州教育委員会事務局
　　DPI (North Carolina Department of Public Instruction) を訪問。
4月4日（火）　サマリーカンファレンス

5　熱心な参加者と献身的なコーディネーター

このプロジェクトは、初年度の段階から大きな成果をあげた。日本からの教員の学校訪問・滞在は、地域の新聞やテレビで大々的に報じられたし、中にはノースカロライナ州の知事に特別に接見した方もいる。そして初年度が終わる段階までに、三郷町立三郷北小学校とウォール・コーツ小学校、東広島市立御薗宇小学校とバージニア・ウイリアムソン小学校の2対の学校が姉妹校提携を結び、将来に渡る交流の基礎を築いた。そしてそれは、二年目以降の提携ラッシュの先駆けとなった。アメリカの教員達も同様に、日本では授業をしたり、クラブ活動に参加したり、教育委員会に出掛けたり、八面六臂の大活躍であった。ディレクターとしては、日米の先生方の限りないエネルギーと熱意に驚くとともに、頭の下がる思いであった。参加された日米の先生方を誇りに思うとともに、厚くお礼を申し上げたい。

このプロジェクトでの主役は学校教員一人一人であるが、大学の教員の果たす役割は非常に大きい。それぞれの地域におけるアメリカ教員の訪問先の手配、教員募集と人選、事前研修、現地での引率と通訳、交渉等々、数え上げるときりがない。そして、どれもこれも何ら見返りのないボランティアの仕事であり、これらを嫌がらずに黙々と行っていただいている。地域の学校や教育に対する貢献の面では計り知れないものがある。このようなコーディネーターの方々の活躍を見るにつけ、国際人の養成について、楽観できるものがある。なぜなら、これらの方々こそ、真のグローバルシティズンのモデルなのではなかろうかと思われるからである。広島大学の神山貴弥先生、鳴門教育大学の小野由美子先生、大阪教育大学の森田英嗣先生、ECUのヘレン・パーク先生、UNCWのブラッド・ウォーカー先生、WCUのルイス・ペトロビッチ・ムワニキ先生、それにわが友ECUのドン・スペンス先生、あらためて感謝し、

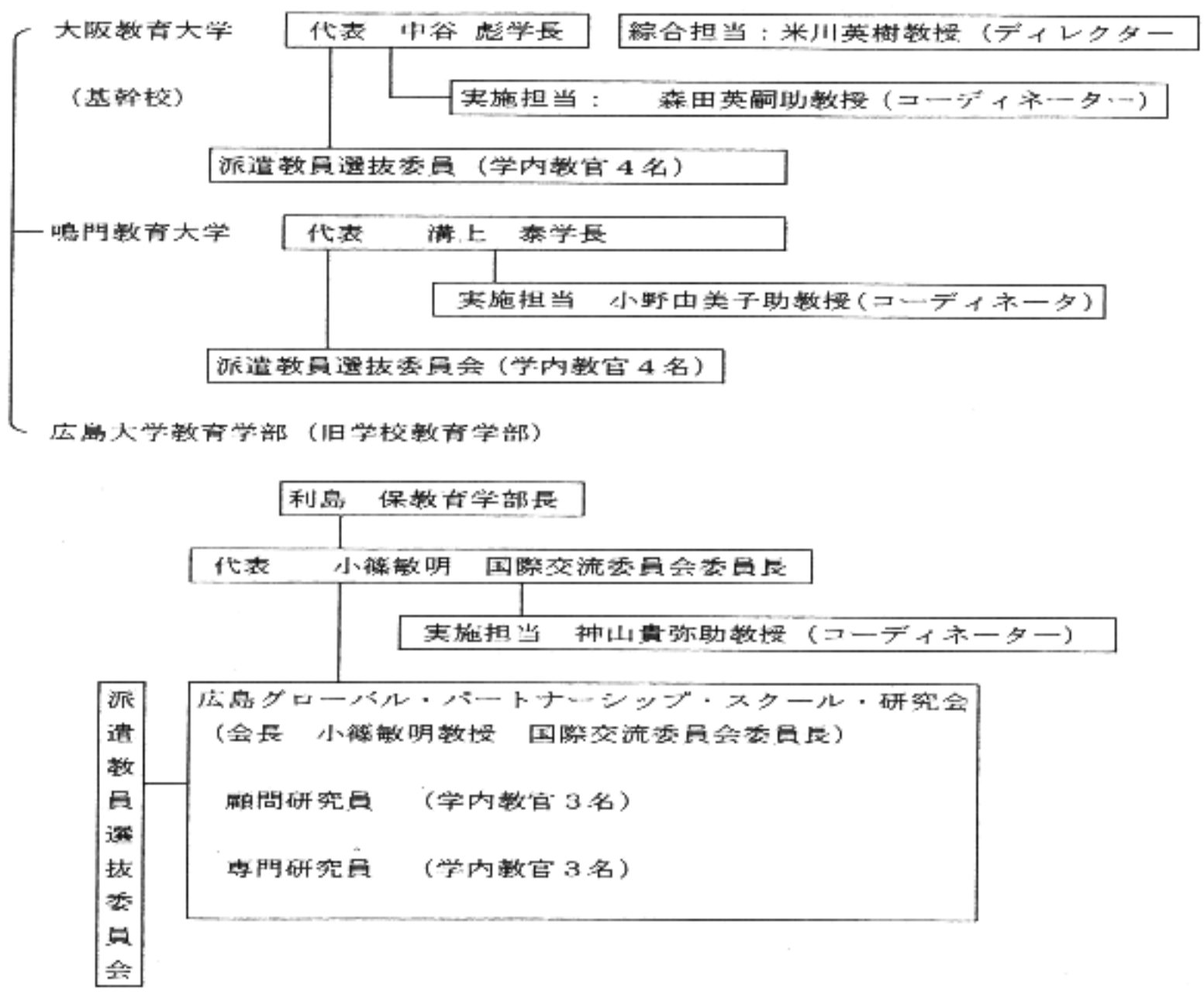
お礼を申し上げる。

そして、このようなビッグプロジェクトを可能にしていただいた米日財団の方々、中でも東京事務所所長の詫摩武雄氏に深甚な謝意を表したい。

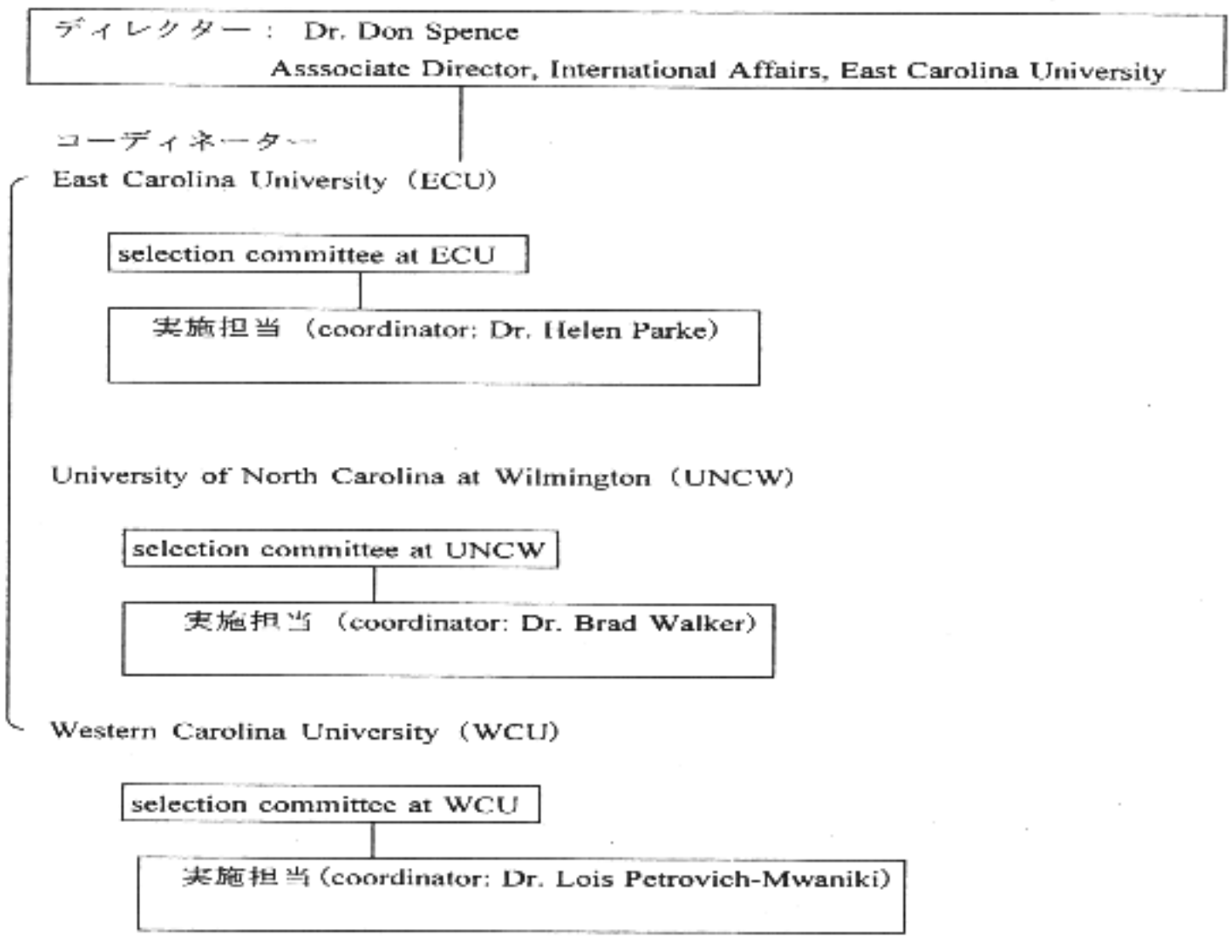
グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
日本側ディレクター・大阪教育大学教授　米川　英樹

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
実施組織　（１９９９年度）

日　本　側



米　国　側



目　　次

はじめに …… 大阪教育大学　教授　米川英樹

ウェスタンカロライナ大学地域

グローバル・パートナーシップに向けて　－GPSP初年度研修を終えて－
鳴門地区コーディネータ
…… 鳴門教育大学　助教授　小野由美子 …… 1

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2000年3月24日－4月6日）
…… 鳴門教育大学学校教育学部附属小学校　教諭　松永　健治 …… 4

日本とノースカロライナ州の小学校の交流を進めるために　－学校紹介と授業観察を通して－
…… 鳴門教育大学学校教育学部附属小学校　教諭　松永　健治 …… 13

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2000年3月24日－4月6日）
…… 徳島県立鳴門第一高等学校　教諭　稲井　一雄 …… 18

自主的主体的な学習活動を支えるものと今後の学校教育・異文化理解の指導のあり方
－米国ノースカロライナ州スモーキー・マウンテン・ハイスクールの教育視察を通して－
…… 徳島県立鳴門第一高等学校　教諭　稲井　一雄 …… 35

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2000年3月27日－4月4日）
…… 鳴門市立鳴門工業高等学校　教諭　森田　浩之 …… 44

日米の教育の異質性についての研究 …… 鳴門市立鳴門工業高等学校　教諭　森田　浩之 …… 49

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2000年3月27日－4月4日）
…… 徳島県立鳴門高等学校　教諭　矢野　智子 …… 53

総合的な学習の時間における国際理解教育とテーマ学習の可能性
…… 徳島県立鳴門高等学校　教諭　矢野　智子 …… 60

食生活から国際理解を広げよう　－日本とアメリカの食事の比較を通して－
…… 広島大学附属東雲小学校　教諭　宮本真由美 …… 66

日米の中学校理科における教育プログラム及び教材の開発とその実践的研究Ⅰ
－必修理科や環境教育におけるインターネットを利用した実践－
…… 広島大学附属東雲中学校　教諭　鹿江　宏明 …… 80

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2000年３月24日－４月６日）
…… 鳴門市北灘中学校　教諭　松浦　和也 …… 85

ボランティア活動についての一考察　－本校の学校紹介、情報発信から－
…… 鳴門市北灘中学校　教諭　松浦　和也 …… 90

ノースカロライナ大学ウィルミントン校地域

Wilmington地区における研修の概要　大阪地区・Wilmington地区コーディネータ
…… 大阪教育大学教育学部　助教授　森田　英嗣 …… 94

グローバルパートナーシップ学校プロジェクト参加レポート（2000年３月25日－４月６日）
…… 大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校　教諭　多田　和彦 …… 96

地域社会及び学校が、中学校体育教育に求めているものは何か
－日米の中学校体育教育の比較を通して－
…… 大阪府柏原市立堅下北中学校　教諭　宇都宮　勧 …… 125

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2000年３月25日－４月５日）
…… 元 大阪教育大学教育学部附属平野中学校　教諭　岡本　圭司 …… 130

A　アメリカにおける第二言語としての英語教育の実際を観察する
観察内容を参考に日常の英語授業の改善点を探り、研究実践する
B　アメリカ社会での学校教育の実状と果たす役割・家庭教育のそれらについて見聞する
…… 元 大阪教育大学教育学部附属平野中学校　教諭　岡本　圭司 …… 136

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2000年３月26日－４月６日）
…… 大阪府立枚方津田高等学校　教諭　金澤　賢司 …… 143

日米間の生徒指導体制の相違点と授業でのコンピューター活用の実体
…… 大阪府立枚方津田高等学校　教諭　金澤　賢司 …… 144

アメリカのThemetic learningとIntergrated learningについて
－Topsail middle schoolでの研修から－ …… 鳴門市瀬戸中学校　教諭　井原　晴司 …… 148

日本はアメリカを向き、アメリカは日本を考える
…… 大阪府立花園高等学校　教諭　蛭田　勲 …… 154

アメリカと日本の子どもたちの絵本に対する反応の違いと共通性
－ストーリーテリングを通して－ … 元 東広島市立御薗宇小学校　教諭　西谷恵美子 …… 160

私の見たアメリカ、ノースカロライナ、ウィルミントン
－２つの学校の比較を通して－ …… 元 東広島市立御薗宇小学校　教諭　西谷恵美子 …… 170

イーストカロライナ大学地域

広島大学地区およびイーストカロライナ大学地区での活動と交流
広島地区・ＥＣＵ地区コーディネータ
…… 広島大学教育学部　助教授　神山　貴弥 …… 179

遙かなるグリーンビル …… 奈良県生駒郡三郷町立三郷北小学校　教諭　松田　博美 …… 182

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2000年３月26日－４月６日）
…… 大阪府八尾市立上之島中学校　教諭　福田　正尚 …… 187

日米の教育交流をとおして見えてくるもの
…… 大阪府八尾市立上之島中学校　教諭　福田　正尚 …… 195

アメリカの学校に見る教育システムの多様性
－学校訪問で感じたこと－ …… 鳴門教育大学附属中学校　教官　近藤　博之 …… 201

子どもの絵でこんにちは　－図画工作科における国際交流の実践的試み－
…… 広島大学附属三原小学校　教諭　半　直哉 …… 207

話し言葉教育におけるコミュニケーション能力育成の日米比較研究
－対立する意見をいかに解決するか、日米の教室文化の違い－
…… 広島大学附属三原中学校　教諭　木本　一成 …… 214

学校の国際化を進めるために　…… 広島県立祇園北高等学校　教諭　江草　章仁 …… 219

日米高校生の学校・学習に対する意識の比較
…… 広島県立広島井口高等学校　教諭　山下　雅 …… 225

グローバル・パートナーシップに向けて
－GPSP初年度研修を終えて－

鳴門地区コーディネータ
鳴門教育大学　助教授　　小　野　由美子

はじめに

何事も無から立ち上げて軌道に乗せるのは並大抵のことではない。途方もない時間と計り知れないエネルギーが必要である。ましてや、それが実施する人個人の利害と直接関わったものではない場合、一種の使命感に突き動かされて、価値があると信じるものの実現に向かってがむしゃらに進んでいくしかない。米日財団助成事業である。グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト初年度を終えての実感である。

本事業の助成決定後すぐの1999年６月末には、アメリカ側の日本研修が実施され、それを受けて、2000年３月24日～2000年４月６日にアメリカ・ノースカロライナで日本側研修を実施する運びとなった。事業の実施決定から今日に至るまでのすべてが日米の関係者双方にとってだけでなく、日本側関係者相互の異文化学習の過程であったといっても言い過ぎではない。そして異文化の学習はけっして平坦ではなく、でこぼこ道、難所も多い。それだからこそ、学習の喜びも大きいと信じたい。こうした得難い機会を与えて下さった米日財団、本プロジェクトの日米ディレクターである、Dr Don Spence (East Carolina University)、米川英樹教授（大阪教育大学）にこの場を借りてお礼申し上げる。

鳴門地区の基本方針：
アメリカの教室で授業をしよう!

初年度ということもあってか、参加者の研修先が決定したのは出発直前になってからであった。鳴門地区から参加した教員７名のうち、ひとりはイースト・カロライナ大学地区へ、もう一名はウイルミントン地区へ配属になり、残りの５名と広島地区からの教員２名とがウエスタン・カロライナ大学地区で研修することとなった。

鳴門地区では、プロジェクト実行委員会において「授業案を立て、アメリカの教室で授業を実践してくる」ことを参加者にお願いすることに決めた。「総合的な学習の時間」の導入が決定したが、総合的な学習では教える者と教えられる者との関係は従来のような「知識を教え授ける者」と「知識を蓄積する者」という関係では成り立たない。しかし、いくら頭で理解できたとしても、一旦身に付いたものはそう簡単に拭い去れるものではない。それを実感するためにはアメリカの教室で授業をして生徒の反応を自分の目で見るのが一番手っ取り早く、学習効果が高い。教師の学習は、まさに、教授法の異文化体験から始まる必要がある、と考えたのである。

ウエスタン・カロライナ地区で研修した３名の高校教諭（稲井、森田、矢野）は異口同音、アメリカでは一方通行の伝達型授業では通用しないことを報告書の中で指摘している。現在日本の学校教育の中で、難題を抱え変わる必要があるにもかかわらず (Yoneyama, 1999)、最も変わりにくく、旧態依然とした授業を続けているのが高校段階といえるかもしれない。その渦中にあって、学習者をどうやって学習内容に興味を持たせ、学習への積極的な参加を実現し、生徒にとって意味のある学習をどのように実践していくのか、という切実な問いへの答を模索する三先生の学習の様子が読む側にもひしひしと伝わってくる。

事前準備の重要性：派遣校の決定を早めに

今も昔も、外国に行って自分の目でものごとを見聞するというのは重要な学習方法である。すべての参加者にとって、今回のノースカロライナの学校訪問、公教育局 (Department of Public Instruction, DPI)、チャーター・スクールの見学など訪問中のあらゆる経験が強力な学習体験であったことは間違いない。その学習体験を、参加する教師の専門とする教科の職能発達 (professional development) の機会とするためには、事前の準備が非常に大切になる。全教科担任が原則の小学校であっても、ひとりひとりの教員は専門を持っているのであって、アメリカの教室で授業をするときには、その専門を生かした授業なり、日本文化の授業を構想し、実践して欲しい、と願う。そうした教

科の学習を構想する過程でパートナーのアメリカ教師と協働することが、授業構想力、実践力を豊かにしていくのではなかろうか。鹿江先生の報告書はまさにその可能性を示唆するものであろう。そのためには、派遣先をできるだけ早く決定し、派遣教員とパートナーとの連絡、話し合いを密にしておかなければならない。大学関係者がプロジェクトに関係する意味もここに見出せる。授業案の構想、教材研究など、現場の先生方と大学関係者との協働の可能性も見えてくる。

教育環境としてのノースカロライナ州

Raleigh で行われたサマリーセッションでは、報告者が「アメリカのノースカロライナという州にある、我々が研修した学校に限って言えば」と断わった上で、総括して研修報告していたのが印象的であった。それほどに「アメリカでは」と一言ではけっしてくくれない多様性がアメリカ国内には存在する。研修先であるノースカロライナ州が政治的にどのような教育環境にあるかを事前に参加者にしっかりとブリーフィングしておくことも、実施する側の責任である。

ノースカロライナ州は80年代から始まる教育改革をリードする州の一つである。今回の研修では、ウエスタン地区だけが訪問できた場所として、North Carolina Center for the Advancement of Teaching (NCCAT：ノースカロライナ授業振興センター) がある。この説明は参加者の報告書にも詳しいが、「教育知事」として全米に名を馳せたノースカロライナ州前知事、ジェームズ・ハントが第一期の知事就任時代に、全米最優秀教師に選ばれた州内の教員の意見を参考にして設立した施設だという。その目的は、教師の授業実践力量を高めるために、職能開発の様々なワークショップに参加したり、長期に滞在して教材開発にそしんだり、独自のテーマを徹底的に追究できるようにというものである。宿泊施設、カフェテリアを備えた施設はホテルと見間違うばかりの快適さである。

ハント前知事は1993年に再び州知事に就任し、引退する2001年初めまで、90年代のアメリカ教育改革をリードした。一方で教員の待遇改善を行いながら、こどもの学力の改善を学校の責任として強く打ち出したのである。その政策がABCである[1]。ABCとは、Accountability、Basic Skills, Local Controlの頭文字を取ったもので、同州の改革方針を示している。州は、学習指導要領によって各地方学区が準拠すべきカリキュラムの大枠を示しているが、それをどのように現場におろしていくかは、地方学区の決定事項とされる。教科書、教授法も学区、学校の裁量権に属する。将来子どもたちが学校を卒業して社会に出たときに最低限必要とされる基礎技能を、すべての学習者に徹底して習得させることが学校教育の第一の目的である。そうした目的を達成しているかどうかを確かめるために、達成基準をはっきりさせ、それに向けて全校で一丸となって努力した結果に対して、校長は責任説明（アカウンタビリティ）を負うのである。毎年、州内の全学校は、あらかじめ予測された学力の伸び率を達成したかどうかを測定され、その結果は「学校の通知表」として公表される。また、3年以上の全学年で学習到達度をチェックするためのテストが学年末にある。第3、5、8学年の学年末テストは、初等教育高学年、中等教育、後期中等教育の各段階への「入り口」(Gateway) といわれる進級テストの資料として代用されるのである。州当局によると、それは、成績の悪い子どもを取り上げて責めるためではなく、すべての子どもに基礎学力を保障するための手段として存在し、できるだけ早く学習上のつまづきを発見し、それに対する治療、対策を早めに講じようというのが趣旨だという。

これ以外にも、コンピュータ技能のテストや、第8学年相当のテストに合格することが高校卒業用件として求められていたり、学校に入学するや、およそテストから自由になる時がないのでは、との印象を持つ。しかし、その趣旨、また、その実現を可能にさせるための職務の分業体制（授業担当教諭、AG、LDに対する支援、学校カウンセラー、進路カウンセラーなど）など、われわれにとって学ぶべき点は数多い。

ノースカロライナの教師との対話、交流、協働は始まったばかりである。このプロジェクトが、教員自身がみずからを取り巻く教育環境を広い視野から見詰め直すきっかけになることを願って止まない。

参考文献

Education Week (2001) *Quality Counts*. http://edweek.

[1] ABC＋は、ABCを完全実施するための戦略的プランを提示したもの。

org. sreports/qc01

National Assessment of Educational Progress. *The Nation's Report Card : 2000 Mathematics Assessment Results.* http ://nces. ed. gov/nationsreportcard

North Carolina Department of Public Instruction. (2000) *How Are North Carolina Schools Really Doing?*

North Carolina Department of Public Instruction. (1999) *The Facts on North Carolina's Student Achievement.*

North Carolina Department of Public Instruction. (n.d.) *Facts and Fugures : 1998-1999.*

North Carolina Department of Public Instruction. (n.d.) *Student Accountability Standards.*

North Carolina Department of Public Instruction. http ://dpi. state. nc. us

Yoneyama, S. (1999) *Japanese High School : Silence and Resistance.* Routledge and Kegan Paul.

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト
米国現地研修ジャーナル（2000年３月24日－４月６日）

鳴門教育大学学校教育学部附属小学校　教諭　　松　永　健　治

３月26日（日）

朝食後、Clingman's Domeを訪問。スモーキーマウンテンからの眺めは、徳島に似ている。隣のテネシー州との州境もある。

Pioneer Villedgeでは、今から100年ほど前の開拓民の残した住居跡をみた。入植したものの決して豊かな土地ではなかったようだ。Cherokee Museumでは、ネイティブアメリカンの歴史などについて説明を受けた。日本で有名な米国の観光地とは異なる米国をみた。

ゲストハウス到着後、夜のセレモニーのためにみんなで歌「花」の練習をした。

WCU (Western Carolina University) の歓迎レセプション、WCUの学長、Silva市長、下院議員が出席。コンタクトパーソンのPatricia Phillpsと会う。昨年の６月に米国からのGPSP派遣で、広島の三原附属へ来たそうだ。彼女は、スクールカウンセラーで、日本に興味を持ってくれている。学校訪問では、ＴＰシート、折り紙、日本の歌、校歌などを披露したいという希望を伝える。Jones Primary小学校の子どもたちからもたくさんの質問があるとのこと。パソコンを使って交流を進めたいという意見が一致。ビデオレターを送ることも一致。エアーメールも１～３年生ＯＫ。

Jones Primaryの教頭先生から学校の紹介を受ける。４学年（幼長～３年生）までの学校で全校340名の児童がいる。体育や音楽などの専科もいるが、基本的に担任が全教科を指導するとのこと。

通訳のクランメル房子さんにも会う。日本の大学で教鞭をとっていたそうで、退職後、夫のクランメル氏と共にＮＣへ来た。

テーブルで、第２回派遣（６月）のメンバーLaura Norris夫妻と話をする。

ホームステイ先のRoxana Cox夫妻とも会う。

27日に訪問するFairview SchoolのSue Nations校長と会う。

Casey Hurler氏に、Randolph Elementary (4-5) のことをお願いする。Jones Primary (k-3) と会わせて双方と交流を持ちたい希望も伝える。

皆さんとは、握手と自己紹介で挨拶をした。仲良くなるには良い方法。一度挨拶をすると忘れにくく意識に残る。レセプションでの茶道の披露はみなさん真剣に見入っていた。

３月27日（月）　訪問先　NCCAT & Fairview School

《教師の研修所NCCAT訪問》

1983年に年間最優秀教師（Teacher of the year 選出方法は、スキル、情熱などをもとに校内、郡、州と選ばれていく。）に選ばれたジーンパウエル氏（ＮＣ出身）がハント知事に研修所の必要性を提案して造られた。年間4500人の訪問者があり自己研修や専門の勉強をしている。90のセミナーを有している。

全米でもこのような施設は珍しく、他の州から見学に訪れ、参考にしてくれている。講師として、専門家を集めてきている。大学の先生や、小中高の先生の中から優秀な人を雇うこともある。その人の著作物や仕事ぶりをＮＣＣＡＴの職員がじかに見て雇ってくる。いろいろなセミナーを有するが体験的なものを重視。ここへ来る教師は、やる気のある人が多く自分で申し込みをして来ている。他の州から来たい場合は、寄付などをしてもらう。

Mr. Cathey Hurler氏の講義から。学校の目的（The purpose of school）として、①社会の価値・意義を伝達75% ②社会を新しく構築する25%を望む。カリキュラムには３種類あり、Formal（教科）、Extra（音楽・美術・野球）、Hidden（日常指導、廊下は右側、発表の仕方など先生の頭の中に申し合わせとしてあること）をさす。

障害児の教育（Special Needs）について。①グループワーク ②手に取ってみるHands on ③活動 ④過程のタイプへの適応 ⑤個に合わせて ⑥視覚・聴覚を多様に ⑦学校の環境 ⑧評価を多様に

州ごとの違いについては、全米統一テストが実施されてきてむしろ似てきている。教科書の10～12種類にテストに出ることを書いてあり、98%の学校が同じことを教えている。

教師以外の職員が増えてきていることについては、司書、カウンセラー、心理学者、障害への介護士、朗読家など。担任が教えることに専念できる環境は羨ましい限りである。

《Fairview Schoolを訪問》

メディアセンターでスライドを交えて学校施設や学習の様子を紹介される。野外学習の場として、学校近くの森や沼を開拓することにした。大学から指導者を週1回呼んで、どうしたらいいか、何が学習になるかを検討して先生と保護者が協力して造った。そこで大人が子どもになったつもりで学習した後、子どもも交えて子どものためのプログラムを作っていった。8学年生（中2）が自分がやろうとしていることの問題点を教育委員会に頼んで現場の環境を直してもらったりした。幼稚園児と5年生が共同学習。ちょうが卵を産むところを2年生はそこで観察した。3年生はハーブガーデン。6～8年生はＧＬＯＢＥプロジェクトに参加していて、自然（水質・空気の質）を観察してワシントンＤＣにデータを送る。ロシアの学校とも交流をしている。世界中から誰でも参加できる。

幼稚園から1年生までは1クラス20人程度で担任は2人。2年生からは2クラスで3人の先生が受け持つ。幼稚園から8年生までの学校。

鳴門附属幼・小・中を合わせたのと学校規模が似ている。Sue Nations 校長は、日本へ研修に来たこともあり、メディアセンターなどにも日本語の掲示物があった。

3月28日（火） 訪問先 Ira B. Jones Primary School

校長・教頭と話し合い。幼稚園から3年生までの学校で、幼稚園は5クラス。小学校は各学年1クラス20人までで4クラス。4年生以上の多くは、Randolph Elementaryに進学。保護者は両校に共通している。全校で340名ほど。学校の目標として正直 (honesty)、尊敬 (respect)、責任 (responsibility)、友情 (friendship) を挙げている。規律（Discipline）を重んじている。Ｋ－3（幼稚園から3年生）で学校をまとめている理由は、先生方の経験から、4年生以上は、3年生までと行動パターンも異なるので、3年生までにしているとのこと。信念、原理（Philosophy）。幼～3年は初期教育期、4・5年はIntermediate、6年～中学Middle。ホームページにもあるMagnet Schoolとは、地域に根ざした学校の意味。Pre-Schoolとして近所の庭に親の手作りの遊具がある。1クラス20名ほどであることをうらやましいと言えば、鳴門附属小も40人いても入試でレベルの似通った子どもを集めているのならいいねと言われた。

以下、校内視察で見聞きしたことを記す。

スペイン語の授業を1年生から導入している。スペイン系の混入に伴いアッシュビル市の取り組みとして導入されている。各クラス毎日20分ずつ実施。第2言語の習得には、短時間でも毎日の学習が大切。フラッシュカードの活用は、速いのがこつ。スペイン語の数詞の学習も行う。鳴門附属小で昨年から取り組み始めた英語の授業は、現在各クラス月2回程度。しかし、ＡＬＴ（Jones Primaryではスペイン語の先生）の先生の授業スタイルは似ている。例えば、ゲームなどの活動を取り入れながら学習を進める点である。

図書館（Library Media Center）では、段階的読書プログラム（Accelerated）を実施。コンピュータにプログラムが組まれていて、子どものレベルを考え、次にどの本を読めばいいか示されるそうだ。本を読めれば司書教諭に告げて次の本に進む。このプログラムを取り入れてから、子どもの読書量が増えた。米国の子どもたちに人気なのが、Dr. Suess（ドクタースース）シリーズ。韻を踏む表現。パソコンもインターネットにつながっている機種もあるが、本格的に運用されるのは秋からの予定。有害なＨ.Ｐ.につながらないようフィルターをかける予定。

給食は、ランチルームでとる。幼稚園と1年生は、朝、食べに来ても朝食は無料である。理由は、朝食を食べずにいては学習効果が上がらないにも関わらず、様々な理由で子どもに朝食を食べさせられない親が増えているから。次年度には、このシステムを学校全体に取り入れる予定。日本の子どもたちも、親の都合から朝食をとらずに登校する子どもが増えている。どこにも似たような状況がある。

3年生に折り紙（Paper Folding）でかぶとをを教えた。子どもたちのほとんどは初めての経験であったが、20人の子どもに対して2人の担任・カウンセラー・通訳・私の合計5名のティーム・ティーチングによって、全員完成した。先をそろえて折る活動が難しそうだった。また、Like this? I need help. など日本の子

どもたちと同じような発言も子どもたちから聞けた。私は、1年生の担任をしていたので、子どもたちの素直な反応は同じなのだという印象をもった。

国語の授業。スペルのテストの後、フォニックスの指導 bat, bit, sit, pit, hit ・・・。フォニックス指導では、①発音 Sound ②綴り Spell ③読み Reading を大切にしている。

図画工作と算数（Art & Math）の図形領域を合科させて敷き詰め模様（TESSELLATIONS）の学習やタングラムを用いた学習を行う。つまり、合科の考え方であると思うが、合科的な扱いで学習を進めている場面に、この後も何度か出合った。3年生にＯＨＰシートを使って、鳴門附属小の学校紹介をした。子どもたちからは、給食や掃除のこと、学校行事のことなどの質問が出た。本時は、テレビ局と新聞社からの取材もあった。そこでは、訪問の目的やJones Primaryの印象などをたずねられた。

先生方は毎年同じ学年を担任しており、担当学年の移動はまずないそうだ。従って、教室も自分の部屋として毎年使用しているので、各部屋により室内のレイアウトが異なる。壁への掲示物も異なる。子どもたちに説明をするにも黒板・ＯＨＰ・白板など様々である。家庭科はなく中学校からになる。

教育委員会から独立した立場Superintendant（監督官）が学校へ度々やってくるそうだ。

職員室はなく、休憩室がある程度。教師は、各自の教室で過ごす時間が長い。

放課後、メディアセンターで教職員と保護者主催のレセプションを開いてただいた。Central Office Staff (Superintendant) & Media 教育委員会から教育長と報道関係者も。記念品の交換とスピーチを行った。Jones Primaryの名誉スタッフとして歓迎を受けた。教育長を通じて市長からもアッシュビルのロゴ入りの手作りカップをいただいた。歓迎会では、職員の他、保護者や地元の有力者とも話す機会があり、彼等がJones Primaryを誇りにしている様子が伝わってきた。本日の学校訪問の様子は、夜のローカルテレビ放送で放映されたのと、翌日の朝刊にも載った。

3月29日（水） 訪問先 Ira B. Jones Primary School

担任以外のスタッフとしてカウンセラー Counselor（子ども相手。子どもに問題行動があったとき、担任ではなくカウンセラーが対応する）、ソーシャルワーカー Social Worker（保護者に対しての教育を受け持つ。問題を抱える家庭を訪問の上、福祉施設と連携して食べ物・衣類の援助を行うこともある。）、リソースティーチャー Resource Teacher（学業不振児を個別指導する。）などがいて、学級担任をサポートしている。日本とはシステムが異なり分業制が徹底されている。専門職を備えることで、問題への対応も素早いであろう。

校長は各教室をよく巡回している。先生方の評価をしているそうだ。トップダウン方式が徹底している。

幼稚園（Kindergarten）では、ポエムを使って文字の読みの指導をしていた。また、お金を使ってコインを覚える学習をした後、10進法（1セント硬貨が10枚で1ダイム硬貨になることを使って）を教えていた。日本の幼稚園とは雰囲気が異なると感じた。米国は、個人の自由を尊重する国なので、幼稚園も自由にのんびりとしているのかと思っていたが、むしろ集団生活の基本を厳しく指導されていた。人に迷惑をかけないこと。集団内で発言をしたい場合は挙手をすることや、他の人が発言しているときには静かに聞くことなど、躾・規律（Discipline）の面を大切にしていると感じた。これは、後にわかったことだが、よい米国市民となるための教育と言うことである。

1年生のクラスではＱ＆Ａの授業をした。どんな花が好きか? 食べ物? 車? 日本の家は? 子どもたちはおとなしいか? 数の数え方、消防車や救急車を呼ぶときはなどの質問が出た。日本の家は、玄関で靴を脱いで入ることや、119で救急車を呼ぶことを知らせると、アメリカは911で呼ぶのだと教えてくれた。日本の文字についての質問を受けたので、漢字「山」と「川」を紹介した。また、私の名前（Kenji Matsunaga）を漢字で書くとどうなるかの問いに対し、松永健治と書いて、松永はFamily Name、健治はFirst Nameと説明を加えた。姓と名の順序が日米で異なることに子どもたちは驚いていた。

2年生の教室で鳴門附属小のＶＴＲを見せた。私のクラスの子どもたちが歌った、アルプス一万じゃく、ごんべえさんの赤ちゃん、森のくまさんが、それぞれ、ヤンキードゥードゥル、John's Brown's Baby , Sippin Cider Through A Strawと呼ばれているアメリカ民謡と同じメロディーだということが分かった。メロディが同じであることに驚いていた。上の3曲がアメリカ

民謡であることを調べて、自学級の子どもたちに歌わせたのだが、よかった。また、給食を自分たちで準備することや自教室を掃除することが不思議な様子であった。

子どもたちが学んでいる教科は似ている。低学年に生活科はなく理科や社会がある。宿題は月から木まであり金曜日は出さない。5日制だからだそうだ。

教室には近隣の大学からのStudent Teacher（教生19歳）がいて、1年間指導教官の下で研修を受けているとのこと。私たちの附属校も、年に1ヶ月1クラス5名の教育実習生を受け入れているが、NCの方がより実践向きであると感じた。

Ms. Tsirosにギリシャ料理（オリーブオイルに長粒米、こしょう、絹さやなどで作ったピラフ）を作ってもらった。彼女は祖父母の代にアメリカへ移住してきたそうで、週1回彼女の母国の料理を授業に取り入れた授業を異文化理解教育の一環として行っている。彼女自身も母国の文化を継承することを大切に思ってる。自国の文化を誇りに思い、それを子どもたちに伝える中で異文化理解教育を実践していることに感心した。私たち日本人も自国の文化について誇りをもち続けなければならない。

Reflection on Multicultural Approaches（多文化教育の学習会）

出席者 Mrs. Anderson, Mrs. Harris, Mrs. Bynum, Mrs. Robinson, Mrs. Fletcher, Mrs. Lipe,
通訳 Miki Ishikawa, Kenji Matsunaga

各先生方が自分の母国（フランス、ドイツ、スウェーデン、ネイティブアメリカンなど）の歴史や文学や言語から学ばせようとしている。それぞれ出身国が異なることを生かして多文化理解教育を進めている。質問されたこととして、99%のパソコンが日本から輸入されているのに対し、日本の学校はパソコンがアメリカほどないですね。1クラスに子どもが2倍もいるのに、教室に1～2台のパソコンしかないのか。漢字は1000近くあるそうだが、タイプするのも大変だ。子どもならなおさらだ。コンピュータ教育が遅れているという話の後で、日本の教育水準はイスラエル、ドイツと並んで世界最高ではないかと指摘を受けた。日本を離れて痛感した日本の情報教育の遅れであった。

障害児教育、特にADHD（Attention Deficit Hyperactivity Disorder）症候群の子どもにはどのように対応しているか。薬を飲めば状況を改善できるにもかかわらず、アメリカでは教師から薬を与えることはできない。日本ではどうか。日本ではどうやって薬を飲むことを勧めているのか。などを聞かれた。Theme Studying（テーマ学習）について。日本の総合的な学習に学習スタイルは似ているが、NCでは合科的な意味合いが強い。海がテーマなら、そこから科学や地理などに学習が広げられていく。国をテーマにとれば、音楽、美術、文化、食生活、歴史、地理などについても学習を広げられる。テーマ学習は、教科横断的な学習に近い。また、テーマ学習を進めるに当たり、子どもたちの主体性を大切にしすぎると学習内容の質の低下が懸念される点について私が質問をしたところ、KWLの考え方を教わった。K（Know：何を知っているか）、W（Want to know：何を知りたいか）、L（What you learned：何がわかったか）の3つを常に子どもたちに問い続けることで、子どもの学習がずれないようにしているそうだ。授業の後半で、「今日何を学びましたか」と聞く。子どもはノートに書いたり発表したりする。

評価について。プロファイル（Profile）とポートフォリオについて聞いた。これらは、3年前から広がり始めた。プロファイルにはReading ProfileとWriting Profileがあり、チェック式の進歩表のような物（資料も別にいただいた）である。担任の先生が読み書きについて指導がどのようになされたかをチェックして親と話し合う。1～3年まで（この学校は3年までしかない）使っており、過去の担任の指導の様子も分かる。次の担任にも参考にしてもらえる。子どもの学習の進歩状況やレベルも分かる。これは、州の必修科目テストに合格進級させるための手段であるとか。美術や音楽などの教科がいかに重要視されていないかということだとの意見も出た。進級テストは州によるテストで、年間180日学校に来て、3年生から受け始めて8年生まである。先生は、何が出るかは教えられないが、それに備えることはできる。基本的に国語なら、When, Where, Who, What を常に考えるよう教えている。ポートフォリオは、単なるファイルで、美術や作文などの個々の作品をまとめておいて年に3回ぐらい家へ持ち帰る。教師と子どもが1つずつ気に入った作品を選んでファイルに入れていく方法もある。

最近日本でも、総合的な学習の導入と関わって、学

校ごとにポートフォリオが注目を集めているが、アメリカどころかＮＣの学校の中でもポートフォリオの取り扱い方は異なっているようだ。「アメリカでのポートフォリオ評価とは……です。」とは言い切れないと思った。

３月30日（木） 訪問先 Ira B. Jones Primary School

３年生に折り紙 (Paper Folding) & 鳴門附属小学校紹介 (VTR) の授業を行う。折り紙は、クラス担任の希望で、紙飛行機にした。完成しても、安全のため教室では飛ばさせず、家へ持ち帰ってから飛ばすようにという担任の指示。未然に目にあたるなどの事故を防ぐための判断だとか。

メディアセンター Media Center の参観。パソコンルームとして利用されている。iMac30台の施設に、子どもたちは15人。ＣＡＩタイププログラムのソフトが入っていて、国語（読み）、算数（計算）について段階的にドリル学習を進められるように組まれている。ＮＣのほぼ全体の学校が使っているとのこと。各人の記録がサーバーに保存されていて、習熟度で次のスッテプが決まる。個人の NO. と Name が決められていて、全校児童の記録や学習状況がサーバーに集まり、メディアセンター Media Center 担当の先生が管理している。パソコンは、日本ではやっと公立校に導入され始めたにすぎないのに、ＮＣの子どもたちは、どんどん使いこなしていた。昨日の話し合いではないが、情報教育の遅れを強く感じた。

全校児童（340人）が全員座れる座席と前には大きな舞台付きの集会ホールを有している。オーディトーリアムと発音していた部屋。週が予算を出してくれて1997年に完成した。

体育館 Gym はさほど大きくない。体育館は体育の授業専用になっている。体育専科 P. E. Teacher がいて、全クラスを週１時間ずつ指導している。

音楽 Music の授業を参観。「凧々あがれ」の曲を、日本語と英語の両方で歌わせていた。日本語の歌詞指導に私も参加させてもらった。授業は、体を動かしながら楽器を使い、物語を絡ませる指導方法であった。物語のストーリーを考えながら演奏をさせる。

下校時間は３時。スクールバスや家族の自家用車でのお迎え有り。校長、教頭が見送っている。

多文化理解教育 Multhcultural パート２。Mrs. FletherからNative Americanの歴史について教えてもらう。彼女はNative Americanの純粋の子孫。父方母方の名前として、Pawnee Wichitaを持ち、部族内では White Elk という名前である。彼女は、子どもたちに Native Americanの歴史を語り多文化理解教育の学習を進めている。彼女は、日本の子どもたちにもNative Americanのことを知ってほしくて私に語ってくれた。アメリカは白人だけではなく、いろいろな民族が集まって住んでいるのだと言うことを知ってほしいというのが彼女の願いであった。私は、幸運である。Native American の子孫から歴史を聞けた上に多くの教材もいただいた。私なりに工夫して、日本の子どもたちに彼女から得たものを伝えていきたい。彼女も私にそれを望んでいるだろう。

校長先生のパソコンを借りて、鳴門附属小学校のＨＰを先生方に紹介する。日本語部分は文字化けしていたが、写真部分は問題ない。合わせて、メール交信が可能かどうかを確かめるため、鳴門附属小ＨＰへメールを送る。確認されたら返信メールをもらえるように記述しておいた。

教育委員会等の仕組み（夜のリフレクションミーティングから）

教育委員会 School Board (5-9 peaple) → 管理者（教育長?）Superintendent → 校長 Principals → 教員 Teachersのトップダウン方式。教員が組合組織をもつことは、法律で禁止されている。

３月31日（金）

訪問先　Ira B. Jones Primary School & Ashville middle school & William Randolph Elementary

Ira B. Jones Primary School の訪問は最終日。体育Ｐ.Ｅの授業参観。体育専科が、全学級を週１時間ずつ受け持つ。幼稚園児の体育の授業を参観した。整列の後、１～５を順に唱えさせ、１を唱えた子どもだけを起立させた後、折り返しリレーをした。体育に算数の順序数の学習を含んで行っているとのこと。さらに、リレーは他人との競走ではなく、あくまでも個人内のがんばりを大切にしている。次に、パラシュートを全員でバランス良く引っ張る活動を行った。幼稚園児だが、授業の構成、子どもたちの態度は、日本の小１～２年生ぐらいの感じがした。幼稚園児に対しても規律

(Discipline) が徹底していると感じた。

授業時間は、30分〜40分だが、20分の場合もある。子どもの興味の様子や教科の特性から考えて、担任が毎日プランを立てる。体育・音楽・美術など専科の時間だけは決まっている。

昨日のメールの返事が日本から来た。今後もメールでのやりとりができることを確認。

Ashville middle schoolでノースカロライナ州ハント知事の懇談会に出席

私は、バットフィリップスさんと通訳のクランメル房子さんと共に出席した。地域の有力者や教育関係者Ashville市長、Ashville middle schoolの生徒、メディアなどの出席。警備体制もしかれていた。出席者から教育問題に関する意見をきき、それに対してハント知事が答えたり、逆にハント知事が出席者に質問をしたりする形で進められた。私は、ＮＣへ来た理由と日本の子どもが年間何日学校へ通っているのかという質問を受けた（Ashville市は、180日が登校日)。昨年は200日ほど登校日があったと答えたところ会場の反応は重くなったので、2002年から短くなりますと答えると、出席者や参会者から拍手や安堵の声、笑い声が聞けた。クランメル房子さんの通訳のおかげ。

話し合われた内容として、①小中高大の関係が大切。②スポーツだけでなくアカデミックにも黒人たちは未来に夢をもってよい。③大学の先生が小学校で授業をするのも良い。④学力が職業につながるのだ。スポーツだけが道ではない。⑤地域社会と共に歩む。⑥教師と生徒の関係がうまくいっている。⑦どの子どもも学習能力があることを信じる。⑧市長から教育を重視した政策を採っていることに感謝。子どもが人生に成功するための努力を惜しまなかったことを知事に感謝。⑨女性の職業、社会進出の機会。⑩全ての成功は学校が握っている。⑪子どもにも地域の一員としての自覚を持たさなければならない。⑫低学年の読みの学力の低下が深刻。子どもが社会的地位を獲得していける道が広がっているか。⑬テストの重要性。切り捨てではない。全ての子どもに学力をつけて、Social Promotionをつけて自立できるように。⑭テストをパスするように教師が整えてやる。⑮学校の安全性の問題はうまくいっているか。犯罪防止。

William Randolph Elementaryを訪問。

5年生の算数の先生 (Math Teacher) のNeal Compton先生と算数の教材と指導方法について話し合った。5年生に方程式（例：$2x+4=x+12$）の解き方を教える場合に、シーソー（天秤?）の左側に x の意味の青いコマを2つとサイコロで4の目を置く。右側に青いコマ1つとサイコロで10と2で12の目を並べる。まず、左の4をのけて、右を12から8に変える。青いコマを右1つを取り払い、左側も2個から1個へ減らす。相殺の考え。ここで、左側の青いコマ（x の意味）に対し右側は8なので、x の答えは8であると導くことができるそうだ。この場合シーソーのつり合いは、＝を意味している。－を左右が同値であることの意味と捉えるようにしている。ハンズオン Hands on（手にとってみる。操作してみる。）を大切にしている。日本では、5年生ぐらいになると念頭操作による問題解決が多くなり、具体物を用いての活動は少なくなるが、Compton先生は、Hands onを何度も強調していた。日本の算数教育も算数的活動がキーワードになってきているので、進む方向としては似通っていると思う。

4年生の算数の長さの授業を参観。マーシャ・ジャクソン（Mr. Marsha Jackson）先生。授業の始めに、かけ算のドリルテストを行う。教室にはジャクソン先生の他に保護者のボランティアの方がＴＴ教員としていた。個別指導をいっしょに行っていた。補助教員が欠席の場合に手伝いにきているとのこと。授業はメートル法とスタンダード法（インチ法）についての学習。双方の単位の違いを子どもたちに確認した後、メートル法でプリントの中の絵図や身近な鉛筆・チョークについて目測 Estimate をさせた後、測定 Actual Size を行う方法をとっていた。測定には、教師が用意した30㎝ほどの紙でできたものさしを使用。目測 Estimate が大切であるということについて念を押していた。日本の算数教育でも見積もり、概算などが大切になってきているが、これについてもHands onと同様、我々の進む方向との一致がみられた。

Black History Monthを参観した。民族衣装を身にまとった子どもたちが、黒人の歴史やキング牧師について語ったり、民族音楽にのって民族舞踊を披露したりした。体育館には、イスがぎっしり並べられ、子どもたちや保護者が参観していた。私たちもゲストとして前の席を用意していただいた。私は、幸運であった。たった半日の滞在であったにもかかわらず、このような大きな行事に行きあわせた。人権教育に力を注ぐ同

校の姿勢が感じられた。

学校内を見学。パソコンルームは、マッキントッシュの部屋（算・国・自習用）とウインドウズ98（職業訓練用）の部屋に分かれている。ランチルームには、大人の背丈ほどある大きなトラの模型が飾られている。

William Randolph Elementaryのシンボルであるトラを子どもたちが共同製作したとのこと。見学中に避難訓練が始まる。正面玄関の外へ待避。時々事前通知なく訓練を行うとのこと。正面玄関に学校全員（4・5年生と教職員)の紙人形が手をつなぐように輪になって並べられていた。一人一人を大切にする教育。

メディアセンターでは、インターネットを使って、市内の学校のＨＰを検索していた。パソコンの画面をプロジェクターでスクリーンに映し出していた。そこで、鳴門附属小学校のＨＰを紹介させていただいた。日本語の部分は文字化けしてしまい分からないが、写真等の張り付けている部分について問題なく見えた。William Randolph Elementaryは4・5年生の学校なので、互いのホームページを用いての交流も可能であろう。また、鳴門附属小のホームページに英語のページを加えると、さらに子ども同士の交流に可能性が広がるであろう。

カウンセラーの部屋で集中力を付けるための訓練用ソフトと器具を見せてもらった。センサーのついたヘルメットを着用し、視線と画面内の点との動きから集中力の持続をはかることができるそうだ。

4月1日（土）

Roxana Cox 夫妻の家にホームステイをさせていただいた。

4月2日（日）

同　上

4月3日（月）

訪問先　Exploris Middle School & DPI（ノースカロライナ州教育委員会）

《Exploris Middle Schoolを訪問》

今までとは違うスタイルの学校、チャーター（検証）スクールである。1996年に州から指定を受けているが公立校ではない。私立の非営利団体。博物館と併設していて先生方は博物館の職員でもある。しかし、50パーセントの職員は教員免許がない。学校の目的は、①優れた学校。今までの最高の教育。②全州の実験校。③公開することでＮＣの先生方と成果を共有。Global Study, 世界市民、国際理解。大学機関とつながっているわけではない。過去1年ずつ入学生を募り今年やっと全学年（3学年）そろった。全校160名ほどで、州平均800人/1校に比べ少人数。アメリカでは幼・小・高に比べ中（青少年期）の研究が遅れていたので焦点を当てた。

ＮＣの指導要領から離れることができてオリジナルを付け加えることができる。ただし、1年ごとの評価もあり指定取り消しになる場合もある。しかし、学校全体の成果に対する評価は5年に1回の予定で、まだ3年先のことは分からない。現在のところ読み・書き・算数・パソコンの州のテストの結果は良好である。

テーマをもった学習では、先生がリードして世界に関するテーマを自分に合わせて決める学習を進めている。自分に対する10の質問。世界に対する10の質問。を考えさせる。

決まっていることは、第2外国語フランス語やスペイン語。国際教育。Global Art、Creative Artを1日おき。数学は毎朝のドリルを厳しく。頭のクリアな朝の内に行う。

1クラス14人～20人ぐらいで、Social Issue 社会的事象を取り上げる学習を、担任と生徒の1対1の時間を持ちながらすすめている。

1日の構成は、毎朝全学年の先生と生徒が集まる。数学は教科として取り上げられてる。他は常は統合された時間の中で学ぶ。午後はプライムタイム（自分の10の質問。世界に対する10の質問)として1対1の学習。

国語のスペルや文法のできが悪ければ、ミニワークショップ（補習）を組んで個々の状況に合わせた学習の場を持つ。

8学年のテーマ学習 Theme Teaching では、Biginning（起源）という題で学習を進めている。例えば①アメリカの起源と歴史。②科学の起源と進化論。③学習の起源。高校にはいるまでの自分の新しい学習を考える。①～③までは全部やらなければならない。今のテーマで何をするか、選択肢があるか、見えないところに先生の指示がある。生徒には、常に①批判的に考える人、②自立した学習者、③いろいろな人を考えられる世界市民の3つを自分たちがすることとして考え

られるようにしている。

評価については、自分が自分のノートに目標を書いて、2週間ごとにゴールを決めて、それについて反省や自己評価をする。年4回は、それについて評価をする。うち2回はチェックリスト方式でスキルなどについて先生が生徒を評価する。項目は行動で書いてある。Personal development, Communication, Function, Themeなどについて評価し家庭へ送る。親のサインもいる。もう1つ、ポートフォリオ方式があり、年2回親に対して生徒が先生と親を呼んで自分が何を学習したかアピール、説明する場を持っている。評価は①チェックリスト、②ポートフォリオ、③先生の2ページぐらいの個別の評価（所見）の3つで行う。

この学校への入学は希望者は誰でも受け入れる。ただし定員があるので抽選で決める。入ってくる生徒の学力には差があり、学年の23%は何らかの学習障害を持っていて、25%は英才である。差が大きく開いている。学校近隣以外からも受け入れる。親が進んで入れているが何らかの犠牲もある。例えば、公立校のように体育・美術やオーケストラはない。しかし、子どもを来させようという親の意志で選ばれている。

博物館に、自分たちの学習を展示して訪問者に説明をする機会をもつ。学費は1人当たり約5000ドル。Exploris Middle Schoolの年間予算は10万ドル。博物館の利益は中学校へ回される。

5年に1度の評価やプログラムに対する評価について。親は、この学校に賛同しているから来させているのであり、やめる人もいない。インフォーマルなアンケートをとったり、朝食を親と共に食べながら情報交換をする。親の参加は多い。自分のカリキュラムは自分で決めている。母体のExploris博物館の運営や組織についても決まっている。

午後については、生徒14人に1人の先生がついている。各学年4人の先生で60人ほどを担任している。1人ずつ1時間のカンファレンスでも14時間かかる。

Exploris Middle Schoolにはカウンセラーはいない。先生がカウンセラーの役割を果たしている。事務はExplorisでやっている。今は、先生の一人当たりの生徒数を抑えているので担任の先生の人件費に充てているが、できるならカウンセラーはほしい。問題行動の深刻な場合は、外から専門家（言葉や心の問題について）を呼ぶ。特に言葉や心の問題については、進学前にＡＥＰという州からの書式に記入してもらって自己申告してもらうことになっているが、親からの申告が事実と異なる場合もある。

チャータースクールはスタンダードテスト（州の作成したテスト）を受けることが義務なのかの問いに対して、用具的な教科は受けることや、州の認めた評価を受けることを義務づけられているとのこと。内容的な教科（理科、社会）は自由。学校の成績は州のトップ10に入る。

教師の評価は、今考えているところである。先生の自己評価はあっても、同僚からの評価はない。グループ評価やアドミニストレイター（管理職）の評価はある。学校カリキュラムの評価は、州のトップ10に入っているが、それは問題ではない。中に入ってからの伸び率が嬉しいのだ。

ＤＰＩ（ノースカロライナ州教育委員会）を訪問した。ＯＷＬ（Online Windows for Learning：フクロウの意味）というホームページを州が開設している。ＮＣでは幼稚園から全ての学年でパソコンを使っている。ミドルスクールでは第8学年までにコンピュータスキルを身につけるテストがある。ＮＣではパソコンのテストを教員にも必修にしている。ＨＰには、親も無制限にアクセスできる。先生のためのサイトもある。

ＡＢＣＰｌｕｓ。ＮＣの親、大学、諸団体全てで構成されている。

Student Accountability Standards　95年頃からこのプログラムを開始。その学校の前年度の成績を公式に入れて次年度の伸びを予測。この伸びを元に、予測より10%以上伸びた学校には、全員に7500ドルのボーナスがでる（報奨制度の導入）。予測の半分の伸び率だったり学校の50%が達成できない場合、ローパフォーマンススクールとして、州からアシスタントティーチャーグループ（元校長先生などの団体）を投入して学校運営を改善する。校長が失職する場合もある。過去の未達成学校数については、1年目幼～8年生の内123校、2年目幼～高の内30校、3年目幼～高の内15校と急速に改善されてきた。逆に10パーセント以上の良い学校が増加している。この改善の成功について全米から見学者が来る。

この成功にとどまらずさらに進んでいかねばならない。何故なら、成長率を問題にしたが、学業成績と見

合っているかどうかは別問題。学年の学習内容の40%が未習のままの子どもの場合もある。例えば、学習内容をマスターしたかどうかについて、白人は80%、少数民族は45〜50%、黒人は48%と学業の差が出ているのか何が原因か。さらに、ネイティブアメリカンやヒスパニック系は深刻。進級についてももっと厳しくする。

Gateway。生徒が達成しなければならない責任の基準。Student Accountability Standardsも、再テストは3回まで可能。テストにさらに数学・歴史・経済・生物・英語なども入れていく必要がある。